

短期海外研修における異文化体験

曾田 陽子・飯塚 雄一

Cross-Cultural Experiences on Short-Term Visit to the US

Yoko SOTA and Yuichi IIZUKA

概 要

1999年度の語学・看護学海外研修の参加学生を対象にして、この研修において体験した異文化体験の内容について調査した。その結果、体験内容は「気候・風土」「物理的環境」「アメリカ人の気質」「食生活」「英語」の категорияに分類できた。17日間という短期間の研修であるにもかかわらず、「英語」に関しては他の categoria よりも深い内面的環境の変化が確認できた。

キーワード：異文化体験, 短期海外研修

I. はじめに

島根県立看護短期大学では開学の翌年から語学・看護学海外研修(以下研修と略記)を実施し、現在までに85名の学生と7名の教員が参加している。この研修はほとんどの参加学生にとって、初めての海外旅行・初めてのアメリカ体験であり、一時的にはあるが、日本の物理的景観から抜け出し、アメリカの物理的・社会的環境に身を置くという、異文化体験をする17日間である。

Furnham and Bochner(1986)は、「長期滞在者、留学生、帰国子女らの異文化体験研究は多いが、海外短期滞在者(観光やビジネスのための海外出張)の異文化体験研究は少ない」と述べている¹⁾。しかし最近では、海外研修旅行などを行う大学が増加している傾向にあり、短期海外滞在者の異文化体験研究も徐々に増えつつある。

そこで、今年で4回目を終了した本学の研修において、参加学生達がどのような異文化体験をしているか、その内容を明らかにするために、1999年度に参加した学生を対象にして質問紙調査を行った。

II. 研修の概要

この研修は「海外生活を体験して豊かな国際感覚を身につけるとともに、アメリカの看護・医療の現場を視察する」という目的で行われ、アメリカのシアトル市、ワナチ市(ワシントン州)を訪れる。17日間の研修には、英会話・施設見学・アメリカの看護についての講義・二泊三日のホームスティも含まれる(表1参照)。

III. 研究目的

1999年度語学・看護学海外研修において、参加学生がどのような異文化体験をしたかを明らかにする。

表1 1999年度 語学・看護学海外研修日程

7月12日(月)	関西国際空港発(NW096) Sea-Tac空港着 Wenatcheeへ(chartered bus) 13:00 Lunch at North Bend 15:00 Wenatchee Valley College 着 Dorm Orientation 15:45 Town and Campus Tour 17:30 Barbecue at Fountain
7月13日(火)	9:00 English Class 12:00 Aerobics 14:00 Apple Commission 15:00 Ohme Gardens 17:30 Welcoming Banquet
7月14日(水)	9:00 English Class 12:00 Aerobics 15:30 Water Slides
7月15日(木)	9:00 English Class 12:00 Aerobics 14:00 Aplets and Cotlets Tour 15:30 Life Line Ambulance 18:30 ESL Exchange
7月16日(金)	9:00 English Class 11:45 Leavenworth 17:00 Homestay
7月17日(土)	Homestay
7月18日(日)	17:00 Return from Homestay
7月19日(月)	9:00 English Class 13:15 River Rafting
7月20日(火)	9:00 English Class 11:45 Lake Wenatchee 13:30 Horseback Riding
7月21日(水)	9:00 Wenatchee Valley College発 (chartered bus) 12:00 Seattle University着 Welcome Lunch 14:30 Providence Medical Center
7月22日(木)	9:00 Lecture on Nursing Education in the U.S.A. 13:30 Puget Sound Regional Children's Medical Center
7月23日(金)	9:00 University of Washington Medical Center 12:00 Free Afternoon
7月24日(土)	6:30 Mt. St. Helen's Tour
7月25日(日)	Free Day
7月26日(月)	9:00 Lecture on Health Care in the U.S.A. 12:00 Farewell Lunch 14:00 Seattle Keiro Nursing Home
7月27日(火)	10:00 Seattle University 発 13:10 Sea-Tac 空港発(NW095)
7月28日(水)	16:00 関西国際空港着 23:00 看護短大着

IV. 研究方法

対象者：1999年度 語学・看護学海外研修参加
学生20名(平均年齢20.8才，全員女性)

調査時期：1999年9月上旬

質問紙の構成：

1. 参加者の属性(渡航経験・研修前のアメリカ
への関心・参加動機・英語力)

2. 以下について自由記述で回答を求めた。

17日間の滞米生活を経験して，

1) 印象に残っていること

2) 研修により変化したこと

(1)日本やアメリカに対する見方の変化

(2)日常生活での変化

回答の整理：1については量的評価を，2についてはKJ法を用いて分類した。質問紙は任意記名とし，記述内容が不明確な場合は面接を行ったり，研修報告書²⁾を用いて，記述内容の明確化を図った。なお，異文化体験とは，異なった物理的・生物的環境(物質的環境)，社会的環境に身を置くことで内面的環境が影響を受けることである³⁾。研修中に抱いた印象を問うことは，体験を通して記憶に残ったことを問うものである。記憶に残るということは，その体験がその人の内面的環境に影響を及ぼしたからである。そこで，印象に残ったことを問うことで，どのような異文化体験をしたのかを把握しようと考えた。

V. 結果及び考察

質問紙の回収率90%，記名回答者数は13名であった。

1. 参加者の属性

回答のあった18名のうち，海外旅行経験者は5名，行き先はアジア，ヨーロッパ方面で，渡米経験者はいなかった。

研修前のアメリカへの関心は，「非常にあった」「あった」「全くなかった」の3段階でたずねた。その結果，「海外に興味があり“アメリカ”でなくてもよかった」という理由で「全くなかった」と答えた者，「教員の薦めで参加した」からという理由で「全くなかった」と答えた者を除いては，全員がアメリカに関心を持っていた(図1参照)。参加動機については「アメリカ・外国の生活や文化にじかに触れてみたかった」等の外国への関心が最も多く，次に「研修参加を迷っていたが，親・教員・友人からの薦めがあって

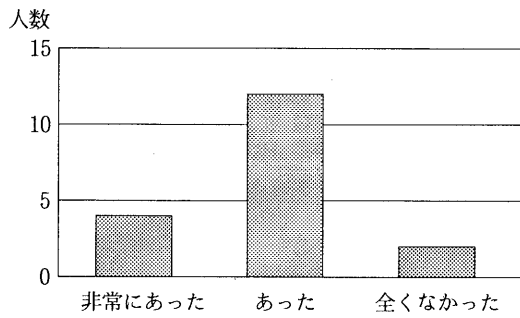


図1 アメリカへの関心

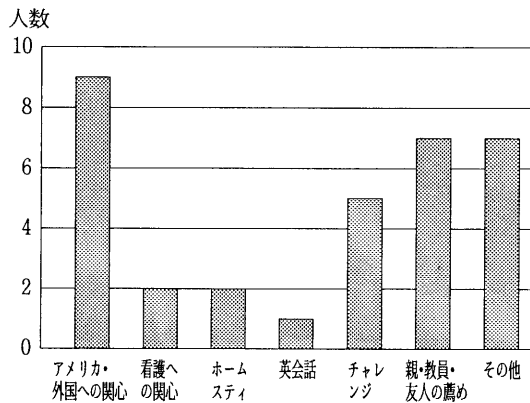


図2 参加動機

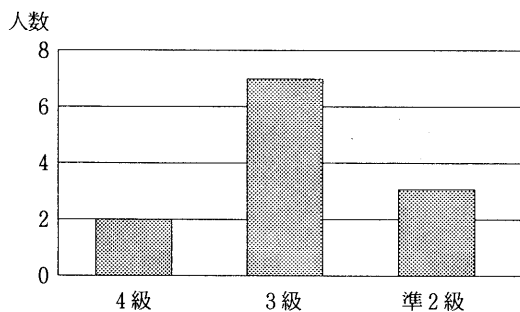


図3 英語検定

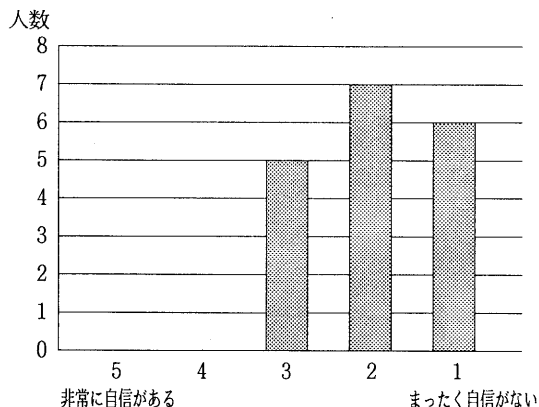


図4 英語力自己評価

参加に踏み切った」が続く。アメリカに興味はあっても、たとえば費用の問題などで参加することに躊躇することは当然のことである。アメリカへの関心の高さだけでは参加の決心がつかなかった時、親の支援や第三者の後押しが参加に結びついたことがうかがえる。そういう支援があったからこそ参加できたという参加者の認識は、研修後の報告書や質問紙に、ほとんどの学生が「親や友人への謝辞」を書いていることに反映している。このほか、「知らない土地で自分がどれだけやっていけるのか試したい」等のチャレンジ精神、「学生時代の良い思い出づくりをしたい」、「またとないチャンスだから」、などが参加動機になっていた(図2参照)。

研修前の英語力は英検4級～準2級を取得している学生が12人で、参加者のうち、看護学科の学生全員が英語Ⅳを履修している(図3参照)。研修前の英会話力は、非常に自信がある(5)～まったく自信がない(1)までの5段階尺度で3～1と自己評価をしていた(図4参照)。ただし、研修後に行った調査なので、研修での体験から自己評価が辛くなっていることも考えられる。

以上のことから、参加者達は語学力に不安を持ちながらも、外国・アメリカへの興味と期待を持ってこの研修に臨んだことがうかがえる。

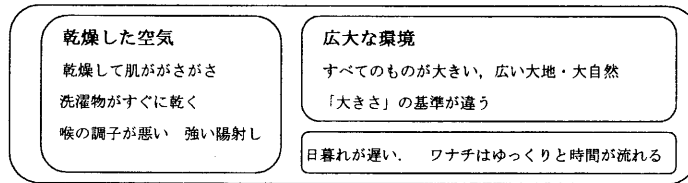
2. 1) 印象に残っていることについて

(図5参照)

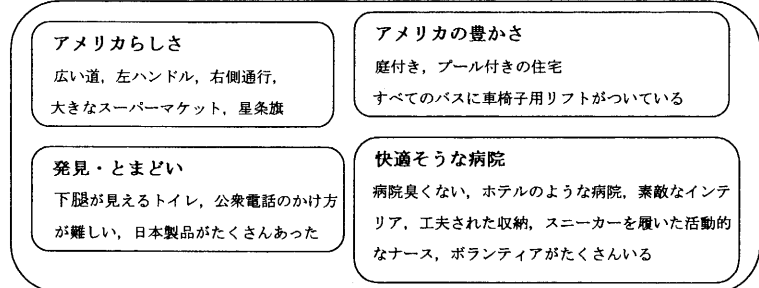
印象に残っていることについては、回答をKJ法によって分類した。その結果「気候・風土」、「物理的環境」、「アメリカ人の気質」、「食生活」、「英語」、という5つのカテゴリーに分類できた。

「気候・風土」では、低い湿度、広大な景観、長い日照時間など、日本ではできない体験をして異国であることを実感している。また「物理的環境」では、星条旗、車の右側通行などという“いかにもアメリカらしいもの”を実際に見ることで、アメリカにいることを実感している。また、プール付きの住宅や車椅子用に整備されたバスを見てアメリカの豊かさを発見している。ホテルのような快適そうな病院や、機能的な服

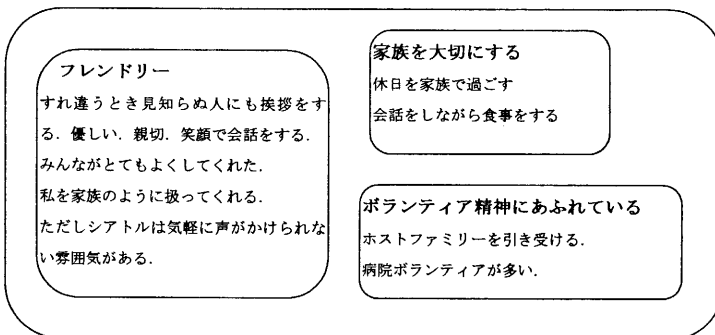
気候・風土



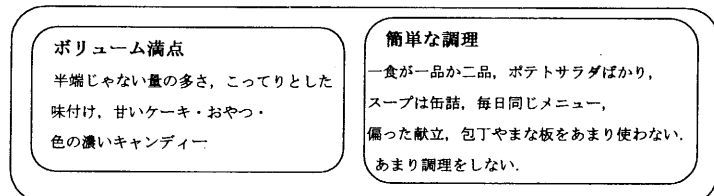
物理的環境



アメリカ人の気質



食生活



英語

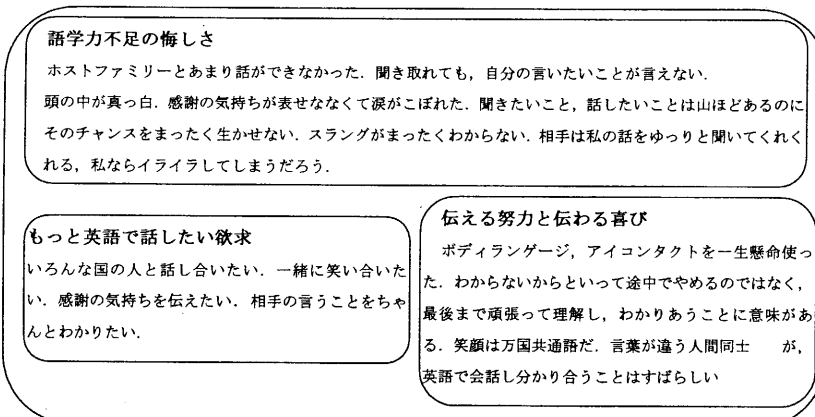


図5 印象に残っていること

装をしているアメリカのナースを羨ましく感じている。もっとも、このような陶酔感を伴った発見ばかりではない。トイレや公衆電話など、日本でも使い慣れているはずのものが、その一部分が少し違っていることでとまどいや不便さを感じている。たとえば、ドアが小さく、使用者の下腿が外から見えるトイレなど、日本ではまず見あたらないものを使い、異国にいることを実感している。このように学生達は、想像を超えたアメリカに感激し、思い描いた以上のアメリカに驚きやとまどいを感じながら過ごしている。

アメリカ人に対しては、一様に好意的なとらえ方をしている。多くの学生がアメリカ人の気質を“フレンドリー”と表現していた。それは、見知らぬ人であるはずの自分にも、アメリカ人が気軽に挨拶をしてくれてうれしくなった経験や、緊張して臨んだホームスティでの暖かな歓迎が影響していると考えられる。しかし、同じアメリカであっても、“フレンドリー”な人ばかりではないということにも気づいている。これはワナチとシアトルという二つの市に滞在して気づいたことである。学生達は両市の人々や雰囲気の違いがあることを感じ取り、それを都会と田舎の違いから生じているものだとも考えていた。

食生活に関すること、学生達の印象に残っていた。ボリューム満点の食べ物に閉口し、おどろばな調理にも驚きを感じている。学生達は日頃から、洋風の食事に慣れているにもかかわらず、味覚や嗜好の違いには悩まされている。日本から持って来たレトルトのご飯や梅干しを有り難そうに食べている光景を何度か見かけた。食文化は、研修を通して学生達を悩ませ続けたものなので、印象に残っていると考えられる。

食生活以上に学生達を悩ませたものは、言葉の問題である。とりわけホームスティでの体験は大き

い。入国以来、日本人だけのグループで行動していた彼女達が、一人から二人という少人数でアメリカ人の生活の場を訪れるものである。「話したくても話せない」体験、「理解したくても理解できない」体験は Furrham and Bochner (1986) がいうところのソーシャルスキルが欠如している (socially unskilled) 状態である。学生達にとってこの体験は葛藤と困惑が生じる衝撃的な体験であり、最も大きいカルチャーショックだったといつてもよいかもしれない。そしてこの体験は「もっと英語が上達したい」という欲求につながっている。また、学生達は言いたいことをゼスチャーや辞書を駆使して一生懸命伝えようとしている。この健闘の結果、言いたいことが伝わった喜びは、彼女達に自信や満足感をもたらしている。理解できない・伝わらないという緊迫した体験が、学生達に英会話力の必要性を実感させている。

2) 研修により変化したこと

(1) 日本やアメリカに対する見方の変化

(図6参照)

学生達は、日本とは異なる「気候・風土」や「物理的環境」に身を置き、「アメリカ人の気質」に触れ「食生活」にとまどい、「英語」の大切さを痛感していた。その体験を通してアメリカに対しては好印象を持ち、アメリカを身近に感じるようになっていた。日本に対しては、アメリカ人と比較することで感じられる日本人の冷た

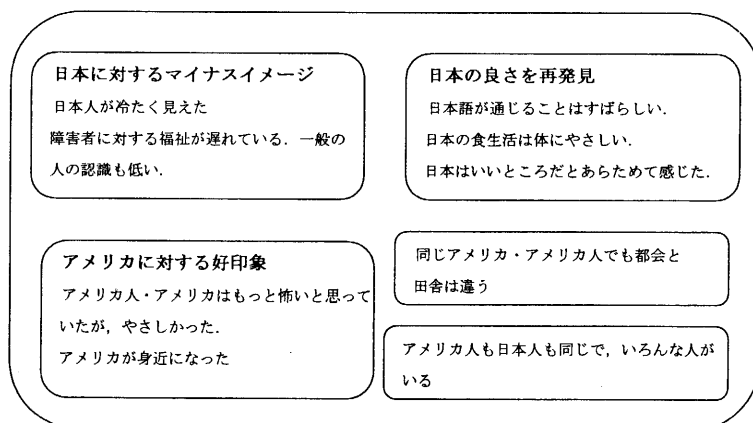


図6 日本やアメリカに対する見方の変化

さや福祉のたち遅れを嘆く記述があった。その一方では、アメリカでの生活を体験することで、日本語が通じる安堵感や食文化など、日本のよさを再発見している。また、人間の多様性や、環境により人や生活に違いが生じる、という共通性も見いだしている。

(2) 日常生活での変化 (図7 参照)

学生達は気軽に挨拶を交わすアメリカ人を見て“フレンドリー”であるという好印象を持っていた。その“挨拶をする”という習慣を帰国後の生活に取り入れたり、アメリカや他の外国への興味が拡大したことを自覚している。さらに、ホストファミリーとの交流を続けているとか、もっと交流を広げたいという気持ちが生まれ、外国人との交流に関心を持ち始めている。また「今しかできないことは何かを考えて生活する」とか「多くのことに目を向け、自分とも向き合おうと思った」など、生き方に影響を受けたという記述や、「もっと英語を勉強して会話を身につけたい」というような、ホームステイを体験して不足していると実感したスキルを訓練したいという記述もあった。

以上のように「気候・風土」、「物理的環境」、「アメリカ人の気質」、「食生活」、「英語」に関することにおいて、学生達は異文化体験していた。Adler(1975)⁴⁾は異文化と接触した初期段階での認知面の特徴を「陶酔的経験、異文化に興味を示す、選別的に知覚する」と、感情面の特徴と

して「刺激され、遊び気分になる、新しいものを発見した喜び、相違点よりも共通点に関心を示す」と述べている。17日間という期間は、異文化接触の初期段階と捉えてよく、Adlerの示す特徴と一致するところが多い。しかし、好ましいところは見るが好ましくないところは見ないというような「選別的に知覚する」という特徴に関しては、必ずしも一致していない。たとえば食生活について、その不健康さ、なじめなさを訴える記述は多い。食べることは本来、楽しむものであり、毎日の活動である。なじめないからといって、放棄できるものではない。日本食への郷愁とあいまって、食文化に対する違和感は、しっかりと認知されたのであろう。

言語に関しては、理解できないことによる混乱や不全感、フラストレーションを抱くが、非言語的なコミュニケーションを使うなど自律的(Adler, 1975)に関わろうとしていた。言語に関しては異文化接触の初期の特徴からさらに進んだ時期の特徴を示している。短期間の研修にも関わらず、このような特徴が見られたのは、ホームステイの体験によるもだと考えられる。箕浦(1994)⁵⁾は滞在期間の長短が必ずしも異文化体験の深さを反映するものではないということ指摘している。参加学生にとってホームステイは、異文化体験を深め、内面環境に影響を与える重要な役割を果たしていたと言えよう。

英語とともにこの研修のもう一つの目的である看護については、アメリカの状況を賛美するにとどまっている。実際、医療施設の環境などには学ぶべき点が多い。しかし、よいところばかりに目がいくところでとどまっているのは、施設見学のあり方に原因の一つがあると思われる。見学という方法が不適切なのではなく、観光での名所見物のように、案内されるままにただ見て歩くというやり方に改善が必要である。もちろん、“実際を見る”ことには大きな意義がある。しかし、たとえばアメリカや日本の医療施設が抱える今日の問題などを、渡

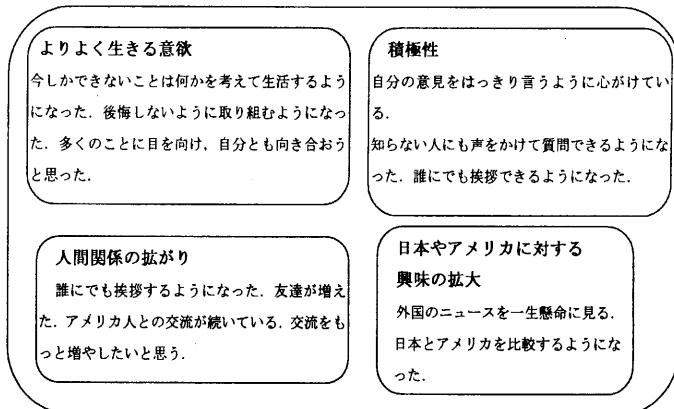


図7 日常生活での変化

米前にまず学習して臨むことにより、問題意識を持って能動的に見学することができ、この体験をより意義深いものにできると考える。

VI. ま と め

1. 1999年度 語学・看護学海外研修において参加学生達は、「気候・風土」、「物理的環境」、「アメリカ人の気質」、「食生活」、「英語」について異文化体験をしていた。
2. 英語に関しては、短期間の滞在にもかかわらず、深い体験をしていた。
3. 看護に関する研修は、事前の動機づけなどを工夫することで、学びを深めることが期待できる。

文 献

- 1) Furnham, A., Bochner S.: *Culture Shock*, 141, Methuen Inc, 1986.
- 2) 太平洋を渡った夏 4 1999年度語学・看護学海外研修報告, 1999.
- 3) 箕浦康子: 子供の異文化体験, 69, 思索社, 1991.
- 4) Adler, P. S., The transitional experience: an alternative view of culture shock, *Journal of Humanistic Psychology*, Vol.5, No. 4, Fall, 1975.
- 5) 箕浦: 前掲書, 70.

Cross-Cultural Experiences on Short-Term Visit to the US

Yoko SOTA and Yuichi IIZUKA

The authors examined in 1999 Summer Program participants what they experienced during a visit to Wenatchee and Seattle, USA. Of twenty students who participated in the program, eighteen students were included in this study. A questionnaire was developed to collect information about a number of issues: basic demographic data, reason for participating in this program, self-perceived English language ability, impression of their stay in the US, change of view towards the US and Japan, etc. From the results, we categorized the cross cultural experiences into five categories: weather or climate, physical environment, Americans' character, food, and the English language. Participants expressed mostly positive attitudes towards their host country. The initial contact stage was marked by the excitement and euphoria of new experiences. In spite of the very short-term visit, the participants noted far-reaching effects about the usage of English, as they often faced communication barriers arising from their lack of English language abilities. Participants returned home with better insights into their own culture and a greater degree of world-mindedness.

Key words : Summer Program, short-term visit, cross-cultural experiences